俺　達　戦　記

長門松希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
俺　達　戦　記

【Ｎコード】
Ｎ０９５１ＢＡ

【作者名】
長門松希

【あらすじ】
坂登山に登ったことがきっかけだった。
日本の何処かに住む関西人二人が江戸時代にタイムスリップしてしまう。しかも体が若返り、７，８歳の姿になってしまっていた。
子供の体に不自由しながら、平成に帰ろうという物語。
※現代のネタなどがあります。ほとんど伏せますがあります。

人物設定（前書き）

この小説にはちょっと卑猥な表現や、グロい表現、男男な表現が入っております。

主人公達じゃなくても男男はいや
グロいの無理
卑猥とか嫌い

という方は読まない方がよろしいかと思います。

人物設定

・主人公

名前　入沢（いりさわ）　冬夜（とうや）

年齢　２０代前半。大学生では無いらしい。

容姿

黒縁の眼鏡が特徴。
髪型は無造作で黒髪。
眼鏡を外すと何もかもがぼやける為、よく眉間にシワを寄せる。
一時期筋トレにハマっていたので、腹筋は薄く割れている。
色彩は日本人。

性格

強気だが、化け物類が大嫌い。
調子に乗りやすく、流されやすい。
友達大好き。
せっかち。

その他

上から見ても行く方向が分からないほどの方向音痴。
ビビリなのでよく絶叫しているが、誤魔化しは得意（自称）。
腕っぷしの強さは一番。
恐怖に出会ったりふとした瞬間に関西弁が出る。

好きな動物はうさぎ。
服装イメージはジャージ。

・準主人公

名前　竹永（たけなが）　真人（まこと）

年齢　主人公と同い年

容姿

笑うと爽やかな印象。暗いと根暗な印象。
金のメッシュを少し入れている。
１７８ｃｍ。
男にしては目が大きい。

性格

好き嫌いに対しては極端。普通だとか、微妙だとかは無い。
ところどころ頑固。
天然（バカ）が少し入っている。

その他

全面的に関西弁。
究極な機械音痴。
めんどくさいものはひとまず破壊。

ｇｏ　ｔｏ　ｈｅｌｌだけは発音が良い。
目を閉じると冷静になれる。
服装イメージはジャージ。

人物設定（後書き）

とりあえず名前と特徴のみ思えておいてくださればＯＫです。

追記→関西弁をあまり使ってない方が主人公です。

始まり（前書き）

第一話投稿。
あとで書き直すかも知れない。

始まり

黄昏時の河川敷に寝転がっている男が二人。
二人とも上下にジャージを着ていた。眼鏡の男が青いジャージ、金のメッシュが入っている男が赤いジャージだった。
ジッと寝転がって動かない眼鏡の男に、メッシュの男が話しかける。

「冬夜、今日はまだ帰らんの？　今日は趣味の何か作るんやなかったっけ？」

「いや……今日はもういいんだよ」

冬夜と呼ばれた眼鏡の男は、だるそう返事をすると近くに置いてあったスポーツバックを枕代りに、頭に敷いた。
その様子を見たメッシュの男は、小さくあっそ、と呟くと手足をいっぱいに伸ばし、大の字になって大きいあくびをして、涙目になりながら眼鏡の男の方に顔を少し傾ける。

「んじゃあさ、久しぶりに山、行ってみる？　坂登山。肝試し的な感覚で」

「……いっらね。もう俺、メンタルレベルＭＡＸだし……真人が行けばメンタル強化できるかもしれんけどな」

目を瞑りながらそう言った冬夜に、メッシュの男……真人が、ツッコミを入れた。

「いや、俺は大丈夫やけど？　お前、俺オバケ怖いねーん、とかこ

の前女の子に言うてたやん。しかもめっちゃ自慢気に。自慢する事ちゃうからな？　むしろ情けないからな？」

「……うるさいよー。黙ろうねー。殴るよー？」

「……え、何で俺地味にキレられんの？」

的確なツッコミに反論できなかったのか、冬夜はフンと言う感じに寝返りを打って、聞こえないとでも言うような感じに、寝たふりをし始めた。

真人は、その様子に少し口の辺りを引き攣らせた。そしてその後、しばらく静かになったかと思えば、スッと息を吸って話し始めた。

「んー……まあ、ええわ。実は最近頼れる男ってのが流行ってるって聞いたから、今度女の子とお化け屋敷行く予定いれたんやけど……しゃーないなぁ。お前連れてったら」

「……」

本当にやれやれだ、というように疲れた表情をした真人に、冬夜はピクリと少し反応する。

（絶っ対、嘘。うん、嘘だ絶対。アイツがこんなわざとらしくいうわけ……ない、はず）

ギリギリで釣られそうになった冬夜は、心の中でそう呟いた。

しかし、真人の次の言葉で、見事に冬夜は釣られる。

「まあた俺だけもてるんやろな～。あ、でも、もしお前にホラー耐性があったら負けるわ。多分」

「……」

「あー、もてる男は辛……」

「よーし、今夜辺りに坂登山行こうか。うん、行こう。絶対行こう」

真人の釣りに上手い感じに釣られた冬夜に、真人は心の中でガッツポーズをした。

「あ、そう？　んじゃあ、まあ……行ってらっしゃい」

「……は？　えっ、嘘やろ！？　お前行く言うたから俺は行く言うたんであって、俺単品やったら、その……あの、あれやから行けるわけないやん！　別に怖いわけやないけど！」

いきなり一人で行け発言をした友人に、ふざけんなよという目線を送る冬夜の顔は、少し青かった。声も少し大きくなっている。

「あー……はいはい分かった分かった。そんな必死にならんでもええやん……。しゃーないから行ったるわ。じゃ、2時くらいに鳥居の前な」

そう言って足を振り上げて、勢いよく立ち上がった真人は、大きく伸びをして、ゆっくりと河川敷の草の所を上がって行った。

「え、いやそう言うのマジ無理やねんけど俺。丑三つ時とか頭おかしいんちゃうのおま、お前、ちょっと待ってくれ！」

ははははは、と笑いながら歩いて行く真人の背中を、慌てて追いか

けて行く冬夜。
真人の方は冗談半分でからかっているだけなのだが、冬夜の顔色は悪いままだった。
（お化けとかマジ無理やって！）

坂登山

と言うことで深夜2時、坂登山の入口の鳥居。真人より早くに来てしまった俺は、鳥居の横の辺りで立っていた。
服は、わざわざ着替えてくるほどでも無いし、面倒だからという理由で、寝間着の青いジャージだった。……寝る直前まで忘れてたとは言えないな。

あー、本当に来てしまったけど……怖えなオイ。坂登山って前からこんな禍々しい雰囲気出してたっけか？　……ああ、今までこの時間帯に来てなかっただけか。小学校頃からここ来てたけど、夜は近付くな、って言われてたし。別に、幽霊やらが出るから夜来ない方が良いというわけじゃ、無いよな？　……やめよ。そういう発想やめよ。大丈夫大丈夫、だってほら、こんな鳥居も立っている神聖な場所に幽霊なんか出るわけない。
（※鳥居が立っていても幽霊がいないとは限りません）

「あー……早く来いよなアイツ……」

「え？　誰が来いって？」

「うぅおう！　……っなんやねんもうめっちゃビビったやんマジでやめてや心臓止まるかと思ったやんけ！　恋に落ちるよりも強い刺激やぞオイ！」

「いや、恋と恐怖の感情を比較すんなよ。つーか、早口過ぎて聞き取れんかった」

いきなり後ろから声が聞こえ、それにびっくりして思わず早口言

葉になった俺を、どことなく呆れたような顔で見つめた真人は、赤いジャージを着ていた。……おそろいかよ。
真人の方は、服については全く問題無いようで、持ってきたらしい懐中電灯をポチポチやっていた。白く広い光が、夜の空に向かって伸びる。俺は、1時間で必死に探したランプをつけた。周りが明るくなる。

「へえ、随分メルヘンなランプやなぁ。ネズミの国で売ってそうやな」

「知らね。母さんが買ってきてそれを貰っただけだから……」

「あそ。まあ、どうでもええんやけど」

「ええんかい」

友人にツッコミを入れた後、しばらくそのままのテンポで会話をした。そして、会話が途切れて数秒間の間が空いたところで、真人が口を開いた。

「んじゃあまあ、いつまでもここにいて話してたら日がのぼるし……さっさと行きますか～」

軽い口調でそう言い、鳥居をくぐって中に入ったのに続いて鳥居をくぐる。その瞬間、ザワザワと木々が大きく揺れた。その後にバサバサッと、鳥の羽の音が近くで聞こえた。びっくりした俺は、「わっ」と小さく声を上げて体を震わせた。
たまたま振り向いていた真人が「ブフッ」と吹き出したのが聞こえて、思いっきり睨むと、真人は軽くごめんごめんと謝った。が、反省だとか言う感情は全然感じられなかった。いや、真面目に謝ら

れてもアレだけど。

「えーっと、広場ってどこやったっけ？」

そう言いながらさっさと行ってしまう真人の足取りに迷いが無いのを見た。こいつ絶対道分かってるわ……と思いながら、置いて行かれないように俺も早足で歩く。

ランプで前が明るくなる分、後ろがジワジワと暗くなっていくような気がして、背筋が少しゾワッとなった。なんて不吉な事を考えてしまっているんだ自分。前向いて行こうぜ自分。

「……おーい、まだか？　いい加減疲れたんですけど」

「……あとちょっとやった気がするんやけど。……あ、あれちゃう？」

少し前を歩いていた真人が差した方向には、椅子のような配置の切り株と、ブランコのかかった木がある、ちょっとした広場があった。間違いない、大分前に見た景色だけども、あの広場はよく遊んだ所だ。

広場を見た時、心の中に懐かしさが溢れ、真人やそれ以外の友達と遊んだ記憶を思い出した気がした。あくまでも気がしただけで、どんな事をしたのかは詳しく覚えていないが。

「あー……結局ここまで何もおらんかったなぁ」

「本当に坂登山って、幽霊とか……出るって言われてんのか？」

「言われてるよ。当たり前やんか。肝試しのために来た言うてんのに、そもそもいないとかどんだけよ」

「そもそもいるのもどんだけよ」

結論↓どっちにしろどんだけよ！

とりあえず、その後の真人の案で、幽霊を待つ事にした。俺は早く帰りたいんだけど。

ホーホーとフクロウか何かは知らないが、鳥が鳴いている。空にはやけに白い満月があった。

結局、ブランコと切り株に座って待ったわけだが……全く幽霊、オバケは出てこなかった。まあ、実在なんかしないから当たり前だけどな。もう待つのも嫌になった俺は、ブランコから腰を上げた。

「……そろそろ帰るか。もういてもしょうがないだろ」

間。

「……真人？　……！」

話し掛けても返事が無かったので、真人の方を振り返ると、真人は切り株にはいなかった。辺りを見回すが、真人はいない。切り株の数m後ろには崖があるが……流石に落ちていないはずだ。そんなにアホじゃないはず。じゃあ何だ？　神隠し？　それとも……幽霊か？

そこまで考えて背筋が凍った。（どうしてだろう、前にも同じ事をした気がする）

……まさかね。

「いやまさか……」

切り株から離れ崖の方に行き、心の中の言葉を口に出して落ち着かせようとした、その瞬間だった。

『友をさがしていますか？』

耳元で涼しげな声が聞こえた。

声の「とも」の部分でビクリと体が跳ね、心臓の辺りがヒヤリとして、息が詰まった。その声は、アニメなどのキャラクター辺りにでも当てられそうな声だったが、そんな事はどうでもよかった。緊張していた時にいきなり声を掛けられた俺は、驚きと恐怖で動けなくなった。

そんな状態の俺を、微塵も気にせずに声は続ける。

『あなたの友、真人殿はいま、この国の過去にいます。救いたいですか？』

……過去？　どうして過去に？　なんのアクションもなくいきなり過去に飛んだのか！？　ついに時代を遡ったのかアイツ！　ちょっと意味が分からないんだが……と、とりあえず過去に遡ったって事で良いんだよな。冷静装ってみるけど。

で、救いたいかどうかって……危険な時代にいるって事か？　そんなら救いたいですか、なんてそんなの救いたいっていうか、救わないといけないだろ。

『わかりました。では、いってらっしゃい』

「は？　どういう、っわ！」

いきなり何かに突き飛ばされ、崖から落ちた。

これは死んだな、と思いながら気を失う前に見たのは、荒削りされたような岩と土の壁だった。

坂登山（後書き）

やっとタイムスリップ段階。
なんで二話引っ張ったのか……区切りがつけにくかったからです。
はい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0951ba/

俺　達　戦　記

2012年1月6日13時47分発行